

セカイにひとり

下（一）

麦（穀物P）

目次

第九章

セカイにひとり

• • • • •

第九章 セカイにひとり

(World Line only Chino)

目が覚めました。またいつもの夢を見ていたようです。とても鮮明せんめいなその夢を見た時、寂しくならないといえば嘘になります。

私が元々いた「本当の世界」、そしてまわりのみなさんのことについての記憶を映し出している夢です。

そう、ここはココア^{みな}さん^な達^{さん}がいない世界です。

私は、このセカイでたったひとりです。
今はまだ、ひとりです。

☆

☆

☆

私が記憶を取り戻したのは、喫茶店での仕事中的ことでした。大学進学を機に、百の橋と輝きの都と名付けられたその大きな街でひとり暮らしを始めて

およそ三か月が経ち、街の中にところどころ『いつもの場所』ができつつあった頃のことです。

大学では史学を学ぶ学科に入り、まずは基礎教養科目の講義を受けつつ、講義が早く終わる日や週末は大学近くの喫茶店『フェリス・シルヴェストリス』でアルバイトをしていました。その喫茶店は表通りから一本通りを入ったところにあつて、華^{はな}やかな街とは対照的な静けさを保っていました。困ったことに、静けさの理由の大半は、お店を訪^{おとず}れるお客さんが少な過ぎるせいでした。

「マスター、このままではお店がつぶれてしまいませんか？」

しとしと雨が降る午後、今日もまた、いつも通りの言葉を口にしました。マスターはいつも通り私の言葉を意に介さず、新聞から顔を上げてフォッフォッ

フオと笑いました。

「安心しなさいチノ君。こう見えて経営は万全じゃ」

「……何かアブナイおしごとはしていませんよね？」

「♪」

質問への答えは今日もなく、いつも通りに下手な口笛でごまかされてしまいました。問い質^{ただ}しても明確な答えは返ってこなさそうだったので諦め、今日もまたお決まりのため息をついたところで、本日三人目のお客さんが来ました。

「こんにちは」

「いらつしやいませ、青山さん」

このお店の常連さんのひとり、青山さんです。週に三回ほどこのお店に来て、幸せをそのまま形にしたようなほんわか笑顔でコーヒーを楽しんだり、時には原稿用紙を持ってきて落書きをするなど、とても楽しそうに過ごしてい

らっしゃいます。お店で原稿用紙に作品を書いている様子は見たことがありませんが、本屋さんの新刊のところに季節に一回は新作が並んでいますし、雑誌連載もお持ちのようですので、筆はかなり速いほうだと見受けられます。

「オリジナルブレンドと、今日はチーズケーキをお願いします」

「いつもありがとうございます。少々お時間を頂きます」

注文を受け、コーヒーを淹^いれる準備を始めました。マスターが事前に目利^{めき}きしてブレンドを調整した豆を取り出し、コーヒーミルで挽^ひきます。それからコーヒーサイフォンを用意して水を入れ、アルコールランプに火をつけます。ここからの抽出工程は、マスター直筆^{じきひつ}の淹れ方指南書をもとに、間違いのないように進めていきます。

しばらくしてコーヒーを淹れ終わったところで冷蔵庫からチーズケーキを取り出し、コーヒーとともに青山さんの席へ運びました。

「お待たせいたしました」

「ありがとうございます。……ふう。実に優しい味わいのコーヒーです。マスターのブレンドの腕と、チノさんの抽出の腕のハーモニーですね」

「恐縮です」

実はこの喫茶店に来るまで、コーヒーを自分で淹れたことは全くありませんでした。ここで働き始めて一か月ほど経った日、初めて自分で淹れてみて、マスターを唸^{うな}らせた時のやり取りを今でも覚えています。

『ふむ。チノ君はかつて喫茶店で仕事をしたことがあるかい？』

『いえ、これが初めてですが……？』

『そうか。注文を受けたり、客席に品物を運んだり、備品を整理したりといった所作^{しよさ}が流れるようで、道具の扱いも手馴^{てな}れているように見えての』

その流れでコーヒーを淹れたところ、マスターから上々の評価を頂き、コ

ヒーを淹れる仕事も時折任されるようになりました。

それからまたしばらく暇になりましたので、コーヒーカップやサイフオンのお手入れを始めました。この静かなひとときが、ちよつと忙^{いそが}しめの生活の中で心落ち着くよい機会でした。コーヒーを淹れるのに一手間かけることができるのもお客さんが少なめであればこそですが、やはりもう少し来てほしいのが本音です。そうしたらアルバイトの店員さんをもう少し雇^{やと}えて、もうちよつとだけ賑^{にぎ}やかで楽しいひとときになりそうだと思います。たとえば私と対照的にとても明るいタイプの店員さんがいたら――

「……？」

その時、ふと脳裏に記憶らしきものが甦^{よみがえ}りました。単に過去の記憶を思い出したにはあまりにも鮮烈過ぎる、それこそフラッシュバックと呼べそうなものでした。しかも、思い出したものはそもそも今までの自分の暮らしにな

かったはずの光景でした。そこに出てきた年下の女の子は自らを『お姉ちゃん』だと宣言して——いえ、その世界では私の方が彼女よりも年下で……この明るい子の名前は——

「ココア、さん？」

記憶が甦った衝撃か、手が一瞬震えて、危うくカップを落として割ってしまふところでした。その様子を見られたか、それとも私の表情が強張^{こわば}っていたせいでしょうか、マスターが微笑みながらバックヤードで休憩^{すやす}するよう勧めてくれました。

勧めに従ってバックヤードに下がり、冷蔵庫から水を取り出してコップに注いで、椅子に腰を落ち着けてから一気に呷^{あお}りました。それから深く息を吐きま

したが、それでもまだ、心臓がどきどきしていました。

動悸^{どうき}が収まるのを待つてから、甦^{よみがえ}った記憶の中にある人達の名前や地名の単語を、思い出せる限り急いで書き留めました。これはとても大変な事態だという気がしましたし、この事態について考えていたら何日も経つてしまいそうだったため、ひとまずは今日のお仕事を無事完了させる方に力を割^きくことにします。書き留めた紙を制服のポケットに収め、ホールに戻りました。

「チノ君、体調は大丈夫かい？」

「はい、大丈夫です」

そう答えましたが、マスターは私を一瞥^{いちべつ}すると、首を軽く横に振りました。

「今日はチノ君には一杯働いてもらったことだし、仕事はここまでということにしよう。いつも通りの時間まで働いたことにするから、後は帰宅してもいいし、ソファースペースや他の好みの場所でくつろいでいてももらってもOK

じゃ。コーヒーはいるかい？」

「……ありがとうございます。それではマスターお勧めのものを」

マスターからコーヒーを受け取り、窓際、青山さんの席の近くに座りました。淹れてくれたコーヒーの豆の品種はキリマンジャロ。……甦った記憶の中にいる一人、シャロさんの名前に似た響きの品種でした。

コーヒーの香りを味わい、一口飲むと、すっと心が落ち着きました。思ったよりも落ち着いたことに我ながら驚きました。もつと動揺が収まらないと思っていたのですが。

今の心持ちは、まさに窓の外に見えている風景そっくりでした。しとしと降りる雨、それでいて空は明るいという、ほんの少し波乱気味の、そんな感じ
です。

先ほどバックヤードで走り書きしたメモを取り出して眺^{なが}め、思いを巡らせま

した。

まず、私の頭の中に突然現れた記憶の数々が本当のことなのか、それとも単なる思い込み、架空の出来事なのか分かりませんでした。とはいえ、後者であるとするにはあまりにも具体的過ぎる気がします。このまま受け流して忘れてしまうには引つ掛かりが多過ぎました。

その時、不意に近くから声がありました。

「チノさん、今日はちよつとお悩みのようですね」

「……わかりますか？」

「ええ。チノさんのことは春からずっと見ていますので」

「さすがです、青山さん」

青山さんも甦った記憶の中によく出てきていました。表情、髪型、服装、口調、纏まとっている雰囲気、どれを取っても、目の前の青山さんと記憶の中の青山

さんは同じでした。完全一致と言つていいほどです。となると、やはり私のこの記憶は本当のことなのでしょうか。

「よろしければ、私に聞かせてくださいませんか？」

いつも通りのふんわりとした青山さんの声と雰囲気になかば乗せられるように、つい先ほどの顛末^{てんまつ}をすべて話しました。話を聞き終えた後の青山さんはしばらく顎^{あご}に手を当てて目を閉じて考え、それから原稿用紙にいろいろと走り書きを始めました。

「……ふう。さて、チノさんに不思議な記憶が甦った現象ですが、いくつかの仮説が考えられますね」

「どのようなものがあるのでしょうか？」

「はい。私は専門家ではないので、確実なことは言えないのですが、小説の題材のためにいろいろな文献^{ぶんげん}を読みましたので、それを元にお答えします」

「よろしくお願いします」

すると、青山さんがバッグの中から眼鏡を取り出して掛け、ウインクとVサインをしました。

「青山さんは普段眼鏡を使われているんですか？」

「いいえ、これは『先生モード』になるための伊達^{だて}眼鏡です」

「そうですか……」

青山先生の講座が始まりました。

「まず、何かを忘れていたような感覚というのは、三つの可能性に分けられます。ひとつは、本当に何かを忘れていて、場所というタグから、記憶の断片が再生されている可能性です。この場合、チノさんは実際になにかを経験していることになります」

「なるほど」

今回の記憶で出てきている特徴的な地名は『木組みの家と石畳の街』、記憶の中ではよく『木組みの街』と呼んでいるところです。先ほど簡単に調べたところ、そう呼ばれる街が実在していることがわかりました。ただ、その『木組みの街』のことは記憶が甦る前には一切意識したことがありませんでした。街の記憶が丸ごと消えていたんでしょうか。

「ふたつめはデジャヴです。……つまり、実は経験していないのに、その経験があつたと錯覚^{さつかく}している可能性です」

「うーん……」

これは一番ありそうな説でした、難しい科学的仮説も、魔法や魔術のような突飛でオカルト的な仮説も考える必要がない、シンプルな可能性でした。この可能性が高そうだと思いつつも、やはりそれで片付けてしまうのはちよつと

引っ掛かりが大き過ぎました。

「そして三つめ、並行世界における経験がこの世界のチノさんの記憶として再生されている可能性です」

「！」

ここまでのところで一番荒唐無稽こうとうむけいな説で、まるでSFの一節にしか聞こえませんでした。とはいえ、一番興味深い説なのは確かでした。なぜかは分かりませんが、私の直感はこの説が正しそうだと言っていました。

「私も聞きかじっただけの話ですし、科学的に裏付けるための手掛かりすら得られていないフィクション、まさにSF、あるいは魔法のような話ではあるのですが、何らかの示唆しさは得られるかもしれませんし、少々お話ししてもよろしいでしょうか」

「ぜひお願いします」

青山さんのキラキラした目に押されたのもありますが、私としても大変気になる説ではありしたので、少し聞いてみようと思いました。

「その話は『並行世界が存在する』という立場から始まります。今生きているこの世界以外にも、違う世界があるという立場です。そこには別の『自分』がいるかもしれませんが、いないかもしれません。『自分』はいなくても、自分以外の『みんな』はいるかもしれません」

「違う世界、ですか」

「ええ」

自分以外の『みんな』はいる、その言葉には色々と感じるものがありました。私の頭に甦ったココアさん達みなさんの記憶、街がこことは違う並行世界のどこかにあって、そこには私以外のみなさんがいて、私だけが別の世界であ

るここにいるという可能性。

そうだとしたら、とても寂しいと思いました。

もし私が記憶の通り中学生だったり、あるいは高校生だったりしたら、違う世界でひとりぼっちだと分かった瞬間に不安になって、泣いてしまっていたかもしれません。今泣かずに済んだのは、大学生になって自分がもっていた街からこの都に出てきてひとりで暮らしつつ、少しずつでもこの街での交友関係を築けているからかもしれません。

「自分で語っておいて言うのもよろしくないのですが、とても曖昧模糊あいまいもことした話です。もし原稿として凜りんちゃんにそのまま出したら『これじゃ読者のみなさんの頭の中も曖昧模糊になっちゃいます！ もつと輪郭りんかくをはつきりさせて！』と書き直しを求められそうです」

「そうですね……」

ここで、ふと疑問が思い浮かびました。

「そうなる、ココアさん達——もともと私と一緒に過ごしていたみなさんとは、なぜ並行世界という壮大なスケールで離ればなれになってしまったのでしょうか？　みなさんにまた会うことはできるのでしょうか……？」

その問いに、青山さんは淡い笑みを浮かべたまま瞑目し、肯定とも否定ともつかないような感じで首を振りました。

「残念ながらまだ、チノさんの疑問に答えを返せるほどには、十分な情報や知識が得られていません」

「そう、ですよ」

私が気落ちしたのを感じ取ったのか、青山さんはしばらく考える素振りを見せ、それから人差し指をスツと立てました。

「ひとつ、アイデアがあります」

「なんでしょうか」

「答えが見えない時は、物語の世界での問題解決の流儀りゆうぎに従って動いてみると
よいかもしれません」

「物語の世界での流儀？」

「ええ」

それから青山さんはいろいろと例を示してくれました。推理小説に出てくる
名探偵のように、手掛かりが得られそうな場所を丹念たんねんにたどって、ほんの少し
でも情報を集めていく活動がひとつ。あるいは冒険小説や英雄譚えいゆうたんのように、必
要な時に必要な場所へ旅立つ力と、ほんの少しの勇気がひとつ。

「手掛かりがありそうなところへ向かってみるのが、解決の糸口につながるの
ではと思います」

「なるほど」

私の中に甦ったみなさんとの記憶には、ここ、百の橋と輝きの都、のものもありましたが、最も多くを占めているのは木組みの街の記憶でした。木組みの街は都から近いわけではありません。列車で何時間もかかる場所です。この私は甦った記憶での認識よりちよつと年上の大学生ですので、時間とお金にはそれなりに余裕がありました。……あとは、勇気もちよつぴりありました。私自身がこの世界で頑張つて獲得したものと、元の世界でココアさんやみなさん、お父さん、お母さん、おじいちゃんが教えてくれたものです。

今こそまさに行くべき時だと感じました。

「青山さん、ありがとうございます。私の記憶にある『木組みの街』に行つてみようと思います」

「ええ。それが一番良さそうだと思います。記憶にある土地を探してみるの
が一番手掛かりを得られそうですし。私も木組みの街に行つてみたいです。先
ほどのチノさんの話によれば、別の世界の私はそことても深い縁があるそう
ですし」

「一緒に行きます?」

「いいですね」

「ダメです!」

流れるままに二人で旅に出る計画が決まりかけたところに、背後から全力で
ストップがかかりました。振り返ると、肩で息をしている凛さんがいました。

「青山先生! 今月は特に締切が多いんですから、もう少し頑張つて書かない
と後半に泣くことになっちゃいますよ!」

「泣くのは我慢します、だから凛ちゃんは安心してください」

「私が泣く羽目になるんです！ さあ翠ちゃん！ 今日中に雑誌のコラム一本仕上げますよ！」

「あゝれゝ」

青山さんは凜さんに半ば引きずられるようにしてお店をあとにしました。

先ほどの様子はマスターの耳にも届いていたらしく、カウンターの奥から小さな笑い声が聞こえてきました。

「大人気の作家と、作家をあらゆる面で支える編集者。いつ見てもとてもいいコンビだねえ」

「ええ……」

「さつき『一緒に旅行する』という感じの話が聞こえたが、どこかに旅に出るのかい？」

「はい。『木組みの家と石畳の街』というところに行こうという話になりました」

た。ここから列車で何時間もかかる遠い街です」

それを聞いたマスターは、目を細めて何度も頷きました。

「ふむふむ。旅は時間と体力を贅沢ぜいたくに使える学生の時にするのが一番じゃ。お金はいざとなればなんとかなるものだからの」

「そうですね……」

「チノ君の日程が決まったら、その間はお店を休みにしてワシもどこか旅に出ようかな」

「いいと思います。どのような場所に行く予定ですか？」

「そうじゃなあ。海までツーリングするか」

「バイクに乗ってらっしゃるんですかマスター？」

「おう。最近はなかなか乗れんが、週一で手入れはしておるよ。どうだい、見ていくかい？」

「マスターの趣味話は最低一時間はかかりますよね。またの機会に……」
「そうじゃったそうじゃった、チノ君はゆつくり休まんな。気をつけて帰るんじやよ」

マスターに挨拶をして、お店を出て家路^{いえじ}をたどりました。その道すがら、私の記憶の中に引つ掛かりそうな気になるものが何かないか探したり、思い出の地巡りをしたりと、久しぶりにこの街をよく観察しつつ帰りました。ただ、今日の時点ではこれといった手掛かりは見つけられませんでした。

お風呂でお湯につかりながら、いろいろなことがあつた今日一日、というより午後半日を思い返してみました。特に甦^{よみがえ}った記憶の中身に注目しました。

記憶の中の私は木組みの街に住んでいて、最新の記憶では年齢はちょうど高校生になってしばらく経った冬、誕生日を迎えたばかりの十六歳でした。今の私より二つ三つ年下です。木組みの街で生まれ、早くに母を亡くし、父とおじ

いちちゃんの三人で暮らしていました。家は喫茶店『ラビットハウス』で、どちらかといえばお客さんは少なめだったみたいです。おじいちゃんが亡くなった時、うちにいたうさぎのティッピーにおじいちゃんが乗り移って、それから私と父、ティッピーの三人、もしくは二人と一匹？ で過ごしていました。

一方、この世界の私は、木組みの街とは別の街で生まれ育ち、両親も祖父母も健在で、引っ込み思案だったのは変わりませんが、友達も少しいます。ただ、友達は同じ年の子ばかりで、記憶の中にあるように年上の友人知人はいません。もちろん姉を自称する家族もいません。そして、身の回りにはうさぎの姿は特にありません。

記憶の中の私との大きな違いは年齢でした。今ここにいる私は大学生になってひとり暮らしをしています。環境が何もかも違っていて、本当なら混乱しそうですね。うなところですが、なぜかその二つの世界の記憶がうまく融合して、自然な形

で自分の頭の中に収まっていることに気づきました。とても不思議な感覚です。やはり、甦った記憶は、私にとって別の世界の、本物の記憶かもしれせん。情報を整理するため、記憶に甦った世界を『木組みの世界』とでも名付けましょう。

ここまで考えたところで少しのぼせてきたので、お風呂から上がってラフなTシャツと短パンを着て、ベッドに寝転がって少し涼みました。『木組みの世界』の私が絶対にしない格好、絶対にしない行動です。記憶が甦る前はあまり気にしていませんでしたが、今となっては我ながらこのような女子大学生、あるいは女子中高生でいいのかと思わなくもありません……。

一息ついて、記憶をたどる作業を再開しました。

『木組みの世界』での私が大きく動き、変わり始めたのが、ラビットハウスにココアさんがやって来た時でした。来たばかりの時は自称姉のしょうがないココアさんでしたが、長く一緒に過ごしてきて、本物の姉のような大きな存在になりました。大学生としての私から見たら一応年下ではありますが、ココアさんはいつでも、たとえ年齢が逆転しても『お姉ちゃん』です。

ラビットハウスでは、ココアさんが来る前からリゼさんがアルバイトとして働いていました。はじめは軍人さんみたいにお堅く厳しい上官でしたが、ココアさんと一緒になって過ごしているうちに、とてもやわらかくて優しい性格の、頼りになる『リゼ先生』だと分かりました。

お次は千夜さん。木組みの街の和風喫茶『甘兎庵』あまうさあんの看板娘にして次期経営者……でしたよね？ 私の記憶ではそのようになっていきますので、そういうことにおきます。千夜さんは独特な感性を持つ方で、お店のメニューを読み

解くためには千夜さんが自ら書いた指南書が必要でした。でも、ココアさんは初見でも指南書なしで難なく読み解けていました。

千夜さんの相方——と呼ぶと本人から異議申し立てがありそうですが、まさにそうした関係性のシャロさん。私達の中では数少ないしつかり者にしてツツコミ役ながら、カフエインが入るとテンションがハイになってしまう方です。

そして同学年のお友達、マヤさんとメグさん。中学生になってからもまわりとの交流が少なかった私のところに突然来て、私が自己紹介の時に話した将来の夢のバリスタを、コーヒーを淹れるプロではなく大型の武器使いと間違えてシストに連れ出してくれて、それをきっかけに仲良くなりました。

みなさんと一緒になって過ごすうちに、私はいつの間にかラビットハウスの外の世界ともさまざまな関係が築^{きず}けるようになっていました。中学校を卒業する時に行った、百の橋と輝きの都^{みやこ}で出会ったフユさん、エルさん、ナツメさ

んとも、木組みの街で再会した時にお友達になることができました。リゼさんのお友達のユウさんは……つかみどころがなくてよく分かりません。少し怖い方かもしれません。

家族以外の大人の人で一番身近なのは青山さんでした。この世界と『木組みの世界』の両方に、同じような立ち居振る舞いでいる数少ない存在です。青山さんと仲良しでお仕事のパートナーでもある凜さんも両方の世界で変わらない存在感を見せています。

この世界には、今のところ青山さんと凜さんしか、『木組みの世界』にいます。みなさんと同じ人はいません。その二人でさえ、おそらくそちらの世界の存在とはやはりどこかで違ってしている可能性が高いです。

今のような事態を解決できる技はすぐには思い浮かびません。それこそ、魔

法でもなければ解決できないような気がします。とはいえ、私が置かれている状況を知り、手掛かりを集めて疑問点を解決しておくことは、何かの役に立つはずです。

やはり、木組みの街に行かねばなりません。旅行するとしたら、最初は月末の定期試験の後が良いタイミングですね。何回か行くことになりそうですから、きちんとお金と時間と行動の計画を立てないと。

マスターに八月初めに三泊四日の予定で木組みの街に行くことを伝え、まずは大学の定期試験に全力を傾けました。うっかり赤点を取ってしまつて追試を受けたたり、追加レポートを提出することになったら大変です。この世界の大学でできたお友達と一緒に乗り越えなければなりません。

「ねえ、チノさんは夏休みにどこか行くの？」

「はい。実家に帰ったり、あとは、ちょっと旅行してみようと思います?」

「旅行かー。どのあたりに行くとか決まっていたりする?」

「ここから列車で何時間かかる『木組みの家と石畳の街』というところに行ってみようかと」

「なんか聞いたことある。街並みがとても綺麗で、うさぎがたくさんいるんだって!」

「なるほど……」

「どうやらこの世界でも、木組みの街はうさぎがたくさんいるようです。少し楽しみにしてきました。」

今日の分のレポート作成を終えてお友達と別れた後、ふと思いました。もしココアさん達とまた会えるとして、その時は私はこの世界を離れて『木組みの世界』に戻る形になるのでしょうか。それともふたつの世界が一緒になるので

しょうか。できれば後者であつてほしいです。

☆ ☆ ☆

試験やレポート提出のシーズンを無事終え、旅行の支度もきちんとして、八月初めの早朝、ひとりで、百の橋と輝きの都^{ミナト}で一番のターミナル駅に向かいました。朝から暑くて、少し歩くだけで額に汗^{ひた}がにじみます。駅に着いたら飲み物を多めに買っておかないといけませんね。

駅に着いてきつぷを買い、さらに朝ご飯と飲み物を調達して木組みの街へ行く列車に乗りました。まだ朝早いとあつて、駅を出発した時には六人が入れる

コンパートメントに私一人だけでした。『木組みの世界』の記憶の中、木組みの街からこちらに旅行した時は朝からみなさんと一緒にとても賑^{にぎ}やかな道中だったのとは対照的でした。

走り始めて一時間経ったあたりで停まる駅からはお客さんが少しずつ増え始め、木組みの街まであと一時間くらいになる頃にはこのコンパートメントも他のお客さんで埋まりました。

お昼前、木組みの街の駅に到着しました。同じコンパートメントの人達と一緒にホームに降り立ち、大きく伸びをして息を吸い込みました。記憶の中ではとても馴染み深く、一方で、この世界の私としては初めて来る街でした。

実は、少しだけ不安でした。

この街に、記憶の通りのものがどのくらいあるのでしょうか。

街並み、自然、街全体の景色。

私達のお店——ラビットハウス、甘兎庵、フルール・ド・ラパン、ブライトバニー。

私達の学校——通い慣れた中学校、私やココアさん、千夜さん、フユさんが通う高校、リゼさんやシャロさん、マヤさんとメグさん、エルさんとナツメさんが通うお嬢様な高校。

私達が住んでいるそれぞれの家。

そして、家族。

きつと、記憶の中の中高生な私だったら、足がすくんで動けなくなってしまうかもしれない。でも、今の私は動くことができます。この世界で

大学生になるまで過ごしてきた経験と、『木組みの世界』でみなさんと一緒に過ごして得たほんの少しの勇氣があります。

「それでは、行きましょうか」

誰に対してかけるでもない独り言でしたが、みなさんと一緒に踏み出しているような気がして、ほんの少しだけ勇氣が増しました。

木組みの街で一番氣になる場所は、やはり私の本来の家・ラビットハウスでした。果たしてこの世界にはラビットハウスがあるのか、あったとして、オーナーは誰なのか。……そこに、私が知る人達がいるのか。

少し構えて息を吐き、前を見据えてラビットハウスに向けて歩き出しました。別の世界では我が家、記憶の中でも我が家ですから、身体が道順を覚えていくはずですよ。

覚えているはずだったのですが……。

こうして街を歩き回っているうちにむしろきちんと頭で記憶をしていなかったらしいと悟りました。別の世界の自分の家、記憶にあるはずの家なのに、街の中を右往左往する羽目になってしまっています。まるで木組みの街に来たばかりの時のココアさんみたいです。

夏まつ盛りのお昼前、このままだとラビットハウスにたどり着く前に干涸^{ひから}びて行き倒れてしまいそうだったので、近くにあつた喫茶店に避難しました。せつかくですから、涼むついでにコーヒーやお店の雰囲気味わいましょう。他のお店を視察しておくことは、この世界の仕事でも、『木組みの世界』に戻った後のラビットハウスでの仕事でも有益なはずです。

「いらつしやいませ。好きな席にどうぞ」

「お邪魔します」

ラビットハウスや、私が働いている『フェリス・シルヴェストリス』とは対照的な、明るく整えられたお店でした。それでいて喧騒けんそうとは切り離されていて、心安らぐ雰囲気が漂っていました。お客さんが数名いて、みな思い思いにくつろいでいました。

あまりにも喉のどが渴かわいていたので、私が外を見渡せる席に座るなり間髪かんはつを入れず提供されたお冷ひやを一気に半分飲みました。

「ふう……」

心地良い冷たさとともに渴かわきが癒いやされ、文字通り生き返りました。

メニュー表を手に取り、注文を決めた絶妙なタイミングでホールの店員さんが注文を取りに来ました。

「ご注文はお決まりでしょうか」

「はい。アイスコーヒーをお願いします」

「かしこまりました」

私と同じくらいの歳で、仕事を始めたてのような雰囲気の人ですが、振る舞いはとても慣れた感がありました。私も仕事をしている時はあのような感じに見えているのでしょうか。そもそもあのお店にはお客さんがいないという悲しい話はひとまず措く^おとします。

「お待たせいたしました。アイスコーヒーです。こちらはセットのミニアイスクリームです」

「ありがとうございます」

コーヒーに浮かぶ氷と、少し汗をかいたグラスを見るだけでも涼しい気分になりました。では、まずはガムシロップなどを入れずに一口。

「……!」

一瞬、負けを認めてしまいそうになりました。正確には、私自身の腕は全くないません。フェリス・シルヴェストリスのマスターや、『木組みの世界』のおじいちゃんやお父さんなら勝てる、それほどの上級の腕前だと分かりました。今まで味わってきた中で一、二を争う美味しさであることは確かです。

続けてバナアイスクリームも一口。甘さは控えめで、それでいてコーヒーのほど良い苦味にぴったりとはまる味です。後学こうがくのためにレシピを尋ねたいところですが、おそらく企業秘密でしょうね。

一流のコーヒーとアイスクリームの美味しさにリラックスして、顔も緩ゆるんでしまっていたのでしょうか。先ほどのホール担当の店員さんが近づいてきて声を掛けてくれました。

「コーヒーとアイスクリームはお気に召めしましたでしょうか」

「はい。私も喫茶店で働く身として一層精進しょうじんしたいと思いました」

「ありがとうございます。実は私がコーヒを淹れました。アイスクリーム作
りも担当したんです」

「そうだったんですか」

「はい」

店員さんが小さくピースをしつつ嬉しそうに笑いました。

ちょうどお客さんの流れが一段落して私一人だけになったので、せっかくで
すからこの店員さんに木組みの街のことを尋ねようと思いました。少し話がで
きないか訊きいてみたところ、店員さんはお店のマスターらしき人のもとに尋ね
に行つて、すぐに帰つてきました。二つ返事でOKしてくれたそうです。

「私がこの木組みの街に初めて来たのは、中学校の修学旅行の時でした。『歴
史的な街並みを見て、聞いて学ぶ』というテーマだったと思います。その時に

なんとなくこの街の雰囲気がいいなと思いました。それから何年かして、大学生になった時にまた旅行で来て、街が好きになりました」

「ありがとうございます」

つい反射的にお礼を言ってしまう、店員さんが首をかしげたのを見て自分の発言が『この世界』では変だと気付きました。

「お姉さんも木組みの街住みなんですか？ 旅のスタイルなのでつきり遠くからいらつしやったものだと」

「あ、いえ。遠い親戚や友人がここに住んでいたことがあって、昔から自分の街のような親近感を持っていたので、ついお礼の言葉が出てしまいました」

ありのままではないものの嘘にはならない理由を組み立てて話したところ、無事納得していただけたようです。店員さんの不思議そうな表情が笑顔に戻りました。

「そうでしたか。ここはとても安心できる街です。なんといえますか、街の感想を表す時にはあまり使わない言葉での表現になりますが、『かわいい』街だなと」

「かわいい……その表現、なんとなくわかります」

確かに少し不思議な表現ですが、それでもしつくり来しました。

ちょうどアイスコーヒーを飲み切ってしまったので、追加注文をお願いしました。目の前でオーダーを取ってもらって、そのまま淹れに行ってもらって、届けてもらう、至れり尽くせり(?)のサービスです。

美味しいアイスコーヒーをまた一口味わって、話を続けました。

「お姉さんは、どうしてこの喫茶店でお仕事をしようと思ったんですか？」

「はい。二回目にこの街を訪れた時に、たまたまい雰囲気の良い喫茶店を見つけ入って、そのコーヒーがとても美味しかったんです」

「なるほど……」

「実はそのお店は、ここの斜向^{はすむ}かいにありました。私が移住してきた時にはもう閉まって、空き家になっちゃってたんですが。今は管理会社の人が定期的にお手入れに来ているみたいです」

お姉さんが指差した先に、シックな雰囲気の家が建っていました。……あれはまさか。

お姉さんに追加で質問をしました。

「そのお店の名前って覚えていらっしゃいますか」

その答えは――

「はい。そこは『ラビットハウス』と名乗っていました」

「っ！」

動揺して、思わずグラスに手が当たってしまい、大きな音が出ました。コーヒーが溢こぼれたり、グラスが壊れなかったのは幸いでした。

「どうされました？」

「すみません。……何でもありません」

「そうですか」

それからはできるだけ平へい静せいを装よそって、お姉さんに木組みの街の感想を聞く活動に戻りましたが、そこはかとなく心配そうな表情が浮かび続けていて、心配させてしまったことをちよつと申し訳なく思いました。

お姉さんとマスターにお礼を言い、斜向かいのラビットハウス——の空き家に向かいました。外見はほぼ私の記憶通りで、窓から垣間見えたホールの中も記憶の通りでした。ただ、営業していない空き家であること、扉の近くに『Rabbit House』と書かれた看板が無いことだけが記憶との違いでした。

この光景に、心がちくりと痛みました。私以外だと青山さんや凜さんしか近くにいなかった点で心積もりはしていたのですが、やはり、みなさんがいないというのを目の当たりにすると、少し堪えます。中学生や高校生の心のままだったら堪えられたかわかりません。

それから、みなさんの家があるはずの場所を、記憶を頼りにたどりました。ラビットハウスを探していた時はものの見事に道に迷ってしまったていましたが、ラビットハウスの存在——そして、あるべきものの不存在——を確かめてからは、甘兎庵やフルール・ド・ラパンなど、みなさんと縁が深い場所のこと

がはつきりと思い出せるようになっていました。

まずは甘兎庵と、その隣にあるはずのシャロさんのお家の場所に来ました。

そこには甘兎庵やシャロさんの家とは全く違う建物が建っていました。近くに甘兎庵のようなお店があるような雰囲気も感じられません。何かしらの手掛かりも、一通り見た限りでは発見できませんでした。

川のそばの広場で日陰ひかげを見つけて座り、お水を飲んで一息つけました。暑さと焦りあせで余計に疲れているかもしれない。今日はあと一箇所、リゼさんのお屋敷を探してからホテルに向かいましょう。

歩くことしばし、それらしき塀へいと柵さくのある場所に行き当たりました。記憶が正しければ、この向こうにリゼさんが住んでいるお屋敷があるはずなのですが。

視界には広い庭や塀、柵などはありませんが、その向こう側が記憶と違っています。本当ならメインの建物以外はあと二つか三つほどしかないはずですが、そこには街の他の場所よりゆとりがありつつも建物がいくつも立ち並んでいました。そして塀と柵が途切れ、門のところまでたどり着きました。

「え……」

そこは個人の邸宅ではなく、大きめの看板が掛かっていて、私が今日から三泊お世話になるホテルの名前が記されていました。

ホテルにチェックインして部屋に行き、ベッドに倒れ込んだら一気に疲れが出てきて動けなくなっていました。

「明日、何か見つかるんでしょうか……」

巡るべき場所はまだまだたくさんあるとはいえ、この先の見通しが不透明なまま

だと分かって、また少し不安が増しました。夕食はホテルに併設されたレストランで摂^とって、お風呂でバスタブにきちんとお湯を張^つて浸^つかったら、少し疲れが取れました。

いずれにしても、少しでも手掛かりを見つけないけません。そのためには気力と体力が不可欠です。リゼさんなら軍人さんの行動鉄則になぞらえてそのように言いそうです。お風呂から上がった後に温かいお茶を飲み、ベッドに潜り込んだらすぐに眠りに落ちました。

☆

☆

☆

木組みの街滞在二日目、思ったよりもすっきりした目覚めでした。これなら問題なく街めぐりと手掛かり探しができそうです。

朝食を摂って、暑さ対策もきちんとして、二日目の探索を始めました。

「準備よし。行つてきます」

この世界の木組みの街は大部分が私が元々いる世界、そしてココアさん達がいるであろう世界——『木組みの世界』と同じであるように見えます。その一方で私達に深くかわる場所は、私の記憶とだいぶ異なっていました。昨日巡ったところだと、ラビットハウスや甘兎庵、その隣のシャロさんの家、そして私が泊まったホテルの場所にあるはずのリゼさんの家が、いずれも空き家になっているか、そもそも別のものに変わってしまっているかという状態になっていました。

今日はまず、その確認の続きをしてみたいと思います。メグさんの家とマヤさんの家、フユさんが下宿しているお家兼お店・ブライトバニー、シャロさんとマヤさんがお仕事をしているフルール・ド・ラパンの位置は記憶をもとに地図に印をつけました。地図にはお店の名前は特に書かれていなかったのですが、今の段階ではあるかどうかはまだわかりません。エルさんとナツメさんが住んでいるお屋敷は、場所は詳しくは分かりませんが、何軒か探してみたらあるかなにか分かるはずです。

地図と道、まわりの風景を慎重に確認しつつ木組みの街の中を進みます。朝早くてまだ涼しいですが、今日も暑くなる見通しだそうです。こうして街をたどっているとまるでシストみたいです。……一人なのがちょっと寂しいです。歩くこと二十分ほどで、メグさんの家兼バレエスタジオがあるはずの場所に

来ました。

「やはり、ありませんね……」

途中までは記憶の通りの街並みでしたが、メグさんの家の近くまで来ると徐々に記憶とのずれが出てきて、メグさんの家があるはずの場所には全く別の建物が建っていました。メグさんの家の代わりに建っているのはちよつとした雑貨店でした。一応お店の名前や、その脇にある表札を確認しましたが、メグさんの名前につながりそうなことは記されていませんでした。開店にはまだ時間がありますので、ひとまず次の探索に向かうことにします。

この場所を離れる際にまわりを確認してみたところ、記憶とずれが生まれているのは家数軒分の範囲で、その境目も慎重にたどらないと分からないレベルでした。ホテルのようにその場所だけ唐突に変わっていれば発見しやすいのですが、徐々に変わっているとすると、木組みの街に來たばかりの時のようにな

確かな記憶だけではたどり着けないことは確かでした。きちんと地図だけでも目的の場所が分かるくらいに記憶が戻ってくれて助かりました。

続けて、マヤさんの家へ向かいました。思い返すと、マヤさんのおうちは訪問したことがありますでした。外見が分からず、記憶にあった住所を頼りに向かっているだけなので、建物があってもそれがマヤさんの家そのものなのか、何か別の建物に変わってしまったのかは分かりません。でも、言ってみたら何かが分かるかもしれません。

歩いて数分ほどで記憶にある住所の場所、マヤさんの家があるはずの場所にとどり着きました。その家には表札は特に無く、無くともそこはマヤさんの家ではないことは明らかでした。——空き家でした。

「期待値は低めにしていましたが、やっぱりこたえますね……」

独り言を口にしたら、心がまた少し痛みました。

気を取り直して探索再開です。先ほどの雑貨店へ戻ってみてお店の中を一通り巡り、かわいいうさぎのペンダントを見つけたので買いました。思えば、こうしたアクセサリーを買って身につけるのはかなり久しぶりでした。この世界では仕事の時に髪をまとめるヘアピンやシュシュを身につける程度、『木組みの世界』でもバレッタをつけていた程度で、それ以外ですと都に遊びに行った時にリゼさんお手製のティップーのミニアクセサリーをつけたのが数少ない例でした。

雑貨店からの道順ですと、フルール・ド・ラパン、そしてブライトバニーの順序で巡るのがよさそうです。いずれもそこそこ歩きますし、日差しもだいぶ強くなってきましたから、日陰を選びつつゆつくり進みましょう。

昨日、今日と街を歩くごとに、さらに記憶が鮮明に甦ってきた感じがありました。見慣れた風景がさらに広がっていて、十数年この街にずっと住んでいるような感覚を覚えました。……確かに元の『木組みの世界』ではそれくらいの期間ずっと住み続けていたので、当たり前といえば当たり前ですが。

沿道のお店や屋台をウインドウショッピングしながらとことこと歩き、フルール・ド・ラパンの前までたどり着きました。そこにはきちんと『フルール・ド・ラパン』の店名があつて、店頭の看板のメニューも見慣れたハーブティーの名前が並んでいました。

「よかつた……」

思わず一緒に涙も出そうになり、慌てて首をぶんぶん振って気持ちを入れ替えました。せつかなのでお店を訪問したいと思います。

「いらつしやいませ。お席へご案内します」

偶然にも、応対してくれたのは記憶の中にきちんとある店長さんでした。『木組みの世界』で会った時と同じようなミステリアスな雰囲気で、それでいてフルールのメイド風制服とロップイヤーの飾りをつけているので、やはりいつ見ても、失礼ながらいかかわしさが少々……。

ハーブティーについてはお店に通ったり、一度お仕事を手伝ったりした中でいろいろと学びましたが、まだまだよく分からないことばかりです。ここはプロにお任せすべく、メニューの前の方にあつた『クールテイストセット』を注文しました。

しばらくして運ばれてきたセットは、よく冷えた柑橘系かんきつけいの香り高いハーブティーと、鮮やかなオレンジ色のゼリーでした。

「こちらのハーブティーは、ルイボスティーにペパーミントとレモンマートル

をブレンドしたものとなっております。主にリラックス効果があります。こちらのゼリーはバレンシアオレンジです」

「ありがとうございます」

ハーブティーを一口、もう一口と飲んで深呼吸をすると、身体の熱と気持ちの昂^{たかぶ}りがだいぶ収まり、リラックスできました。すでに昼前と言ってよい時間になっていて、外はますます暑くなっているため、夕方になるまではこまめに屋内で休憩を取るように、この先の探索計画を練りました。

ここフルール・ド・ラパンを出たら、次はブライトバニーへ向かうことにします。道中で見てきた新しめの地図には記憶通りの場所にブライトバニーの名前が記されていたので、お店があることは確かです。そこでお昼ご飯にしつつ、フユさんにつながる何らかの手掛かりがないか探ってみます。

夕方になったら、私が通っていた中学校や高校、リゼさんやシャロさん達が

通っていた高校を巡って、それから公園に行ってみましようか。最後は温泉プールに足を運んで疲れを癒やしてホテルへ戻る流れで。

お客さんが増えてきたあたりでおいとまして、汗を時折拭きつつブライトバニーへと足を進めました。さすがにここまで暑くなると街を歩く人は少なくなり、みなさんお店などの中に退避していました。もちろん屋台も一旦店仕舞い状態です。もしティップピーがこの炎天下にいたら、焼きティップピーか煮えティップピーが誕生しかねないくらいの暑さでした。

ブライトバニーに着いた時には、暑さでだいぶへとへとなっていました。『木組みの世界』で初めて見た時にはラビットハウス最大のライバルとして警戒していたブライトバニーの看板が、今はいくつもの意味で救世主にして抛り所の証に見えました。

お店に入るととても涼しく、外との温度差が大きいこともあって少し肌寒く感じるほどでした。避暑には最適で、お店の中は涼しさに和なごんだ表情の人がいっぱいいます。私の後からお店に入ってきたカップルの方も気持ち良さそうに息をついていました。

手慣れたお客さんはドリンク注文の時に呪文のような何かを唱えてドリンクを自分好みにするそうですが、私にはそれはよく分かりませんので、メニューを指差しつつ好みになるようカスタマイズして注文しました。お昼ご飯も兼ねるため、サンドウィッチも一緒に注文しました。アルバイト先が喫茶店ですと、こうしたお店になかなか行きませんが、やはりライバル店からの勉強ということで、時には覗のぞいてみることも必要かもしれません。レジでの応対と商品の準備をしてくれた店員さんは高校生のようでした。……もちろんフユさんでも、エルさんでも、ナツメさんでもありませんでした。

ブライトバニーで昼過ぎ、外がまた涼しくなり始めるまで待ちつつ、昨日と今日の状況を整理しました。現在分かっているのは、この世界の木組みの街は、私が元々いて、ココアさん達がいる『木組みの世界』の木組みの街とほぼ同じようなつくりであるらしい、ということでした。街をだいぶ巡ってみて、私やみなさんがかかわっている場所のいくつかは記憶と全く違うような状況になっているものの、それ以外の場所は建物や店名、場合によっては働いている人も『木組みの世界』と同じみたいです。

その中で現状を紐解く鍵となるものがあるとすれば、世界の中で全く変わっていないところと、完全に変わってしまったところの境目あたりではないかと考えました。境目を見るためにもう一度いろいろな場所を訪問するのは明日にします。今日はそうした『境目』がまだ他にもないか探ることに注力します。

考えをまとめたところでサンドウィッチを食べてフラペチーノを飲み、再度街に繰り出すまで少々休憩――

「――はっ！」

ついうたた寝をしてしまっていたようです。手元のスマートフォンで時間を確認したところ、一時間は意識が飛んでいたようでした。とはいえ、時間にはまだ十分余裕があります。むしろ夕方からの行動に備えて疲れを取ることができてよかったです。

ブライトバニーを後にして、『木組みの世界』の私に通っていた中学校に向かいました。今は学校が夏休みシーズンですが、部活動帰りの中学生と結構すれ違います。私はもともとひとりで過ごすのが好きでしたし、ラビットハウスでのお仕事があったので部活動には入りませんでした。実際は、最初の自己紹

介の直後にマヤさんとメグさんに引っ張られる形でお友達になったので、部活動に入らずとも早々にひとりではなくなりましたが。

歩くこと十分ほどで中学校に到着しました。記憶の中の私はこの卒業生で、でもこの世界の私にとっては特に縁がありませんでした。少々不思議な感覚です。外から見る限りでは記憶の通りで、すれ違った子達が着ている制服も記憶通りのものから変わっている感じはありませんでした。……『境目』はここには無いかもしれません。

続いて、『木組みの世界』の私が進学し、ココアさん、千夜さん、フユさんと通っている高校に来ました。こちらは遠方から来て下宿している子が多く、夏休みに入ると里帰りで木組みの街にいないことが多いか、あるいは下宿先のお仕事を手伝う課外活動などに勤^{いそ}しんでいるせいか、部活動をしている子は少ないです。今この時間も人はもうほとんどいませんでした。

少し休憩して、今度は通称・お嬢様高校へ足を運びました。その通称の通り、リゼさんやエルさん、ナツメさんのように暮らしが豊かそうな家の方が多いのですが、シャロさんやマヤさんみたいに特待生として入学する庶民派な方もわりといるそうです。こちらは私達の高校とは対照的に、この時間でも部活動に勤しむ子達の歓声が響いていました。

こちらの学校も外から見ると限りでは、私自身の記憶と合わないような物は見当たりませんでした。以前、ココアさんや千夜さんから、このお嬢様高校には何か魔法でも使えてしまいそうな不思議なものがいくつもあると聞いたことがあります。小説でよくある展開なら鍵になりそうなものがその中あるはずです。もし行き詰まったら、何かしらのつてをたどって調べてみようと思います。

本組みの街の八割近くを歩き通し、だいぶ日が傾いて涼しくなってきたところで街一番の公園に到着しました。この世界でもここはうさぎがたくさんいて、暑い昼の間は涼しい場所で休んでいた子達が徐々に芝生の広場に戻っているところでした。夏場は毛が長いタイプの子達は大変そうだなと思います。おじいちゃん……ティッピーがそうでした。ティッピーは水に濡れるのが大嫌いだったので、暑い時に水を浴びて涼んでもらうことができませんでした。

公園をとことこと巡って、そこかしこにあるうさぎの群れを観察して回っていると、もこもこしたアンゴラウサギの集団を見つけました。冬場ならとても温かそうですが、夏場に隣り合わせになるのはちよつとご勘弁願いたい空間です。とはいえ、この世界ではうさぎと触れ合うことが全くありませんでしたので、久々に（この世界的には初めて）触ってみたくまりました。集団の近くに

しやがみ込み、手を小さく振ってうさぎが何匹か気付いてくれるのを待ちます。幸い、すぐに三、四匹ほどこちらに興味を示してくれました。

「おいでー」

次は軽く手招きをしてさらに近づいてもらいます。決してこちらからズカズカと入り込んで無理やり持ち上げてはいけません。ここからは根気が欠かせません。額ににじむ汗を軽く拭^{ぬぐ}いつつ、手招きしたり手を振ったりすること数分、一匹がびよこびよこことこちらに跳ねて来ました。私の手前まで来て止まり、こちらを見上げて視線を合わせてくれた気がしました。

驚かさないようそつと手を伸ばし、さわさわと触りました。ふわふわもこもこしていて気持ちいいです。うさぎも逃げずにいてくれました。このうさぎ、なんだかティッピーみたいな雰囲気です。ひとつ試してみました。両手でさわさわと触れて、そつと持ち上げて、頭の上に載せてみました。……や

はり安定しませんね。昔みたいになちゃんとバランスを取るには練習が必要そうですね。

うさを元通り芝生の上に戻して、お別れをして公園を後にしました。

最後はホテルに立ち寄って着替えを用意し、思い出の温泉プールでくつろぎます。水着は現地でレンタルして、いざプールへ。

外がだいぶ暑かったのもあって、温泉と言いつつも適度に涼める感じでした。長袖の上着や日焼け止めクリームで守ったものの、やはり一部は日焼けしてしまっていて、ぬるめのお湯でもヒリヒリしました。お客さんの数はやや少なめで、ひとりでも心置きなくぶかぶかと浮いて過ごすことができました。：みなさんがいないとやはり少し寂しいのが難点です。

プールから上がった後、夕食をここのレストランで摂りました。心身ともに

リラックスして再充電できた気がします。

帰り際、売店コーナーに持ち運びができるチェスセットを見つけました。この世界の私はボードゲームにはほとんど触れておらず、実家にも、今ひとり暮らしをしている家にも、特に何も置いていませんでした。せっかくですし、新たに買っているいろいろ研究したり、頭の体操をするのも良いかもしれません。わりとお手頃な値段のそれをお土産として買って帰りました。

ホテルに帰って歯磨きをして横になったら、あつという間に睡魔に襲われて眠りに落ちました。

☆

☆

☆

三日目の朝を迎えました。今日はやや曇り気味ですが相変わらず暑く。今日は名探偵に倣^{なら}って活動しましょう。すなわち現場^{げんば}百遍^{ひゃっぺん}です。……このセリフは名探偵の言葉でしたっけ。名探偵じゃなくて刑事さんの言葉かもしれません。

私にとって一番見慣れた場所は、やはりラビットハウスでした。この世界では残念ながら空き家ですが、まわりを改めて観察してみるだけでも、何か新しい情報が得られるはずです。

遠くにラビットハウスが見えてきました。家に帰ってきた気分になります。が、この世界の私の家ではありませんし、もちろん中には誰もいません。どのあたりから手掛かりを探そうか考えつつ近づいていると、ちょうど隣の家から人が出てくるのが見えました。これはチャンスです。小走りでそちらに駆け

寄って声を掛けました。

「すみません！」

「はい、あら、どうなさったの、お嬢さん？」

人のよさそうなおばあさまがこちらを向いて微笑みました。隣の空き家になつてゐる建物について尋ねると、すぐに説明が返つてきました。

「お隣さんねえ、もう長いこと空き家なんだけど、管理されている会社さんが月に一、二回は掃除しに来てゐるみたいで、だから綺麗なのよ」

「確かに、とても綺麗です」

内容は一目に入つた、ここからすぐ近い喫茶店の同年代の店員さんが語つてくれたものと同じでした。二人の口から語られるなら、これは記憶違いなどではない、本当のことと言えそうです。

「ええ。でもせつかくいい場所なのに空いてるからちよつと寂しいわ」

「昔はここにどんなお店があつたんですか？」

私のその問いにおばあさまが目を一層細くして、遠い昔を懐かしむ口調で語ってくれました。

「ここは昔喫茶店があつたのよ。若いご夫婦でしてらして、結構繁盛してたのを覚えてるわ」

「そうだったんですね」

「ええ。とてもダンディなマスターに、歌が上手な奥様で、あとは小さい女の子もいらつしやったかねえ。家族三人で楽しそうだった」

「！」

その家族構成と特徴は、まるでかつての我が家のようでした。おじいちゃんがいれば完璧でしたが、おばあさまの語り口によればいなさそうです。

「でも、何年か前にここからだいぶ離れた田舎の方にみんな揃ってお引越されたのよ。奥様のご実家を受け継いで、そちらで改めてお店を開くって話だったわ」

「お引越先がどのあたりかって分かりますか？」

是非とも知りたいことでしたが、残念ながら返ってきたのは首を横に振る仕草でした。

「ごめんなさいねえ。年をとると記憶が不確かになっちゃってねえ。昔聞いたんだけど忘れちゃったのよ」

「そうですか……」

「ごめんなさいねえ。……あ、でもお店の名前はそのまま使うって言ってた気がする」

「何という名前ですか？」

答えは分かっているのですが、やはり聞かずにはいられませんでした。

「『ラビットハウス』よ」

一日目の喫茶店の店員さんが告げた通りの名前が、このおばあさまからも語られました。やはり、ラビットハウスは喫茶店として実在していました。そしてそれはどこかに引越した後もその名前を名乗っていると。

二回目の話なので動揺はしていませんつもりでしたが、傍^{はた}から見ているととてもそうではなかったようです。おばあさまがあからさまに心配そうな表情になりました。

「あら、お嬢さん大丈夫？　こう暑いとクラクラしちゃうわね、せつかくですしうちに上がって冷たい飲み物をどうぞ！　さ、行きましょう！」

「あ、あの……ありがとうございます」

積極的に勧められたので、その言葉に甘えることにしました。

オレンジジュースを頂き、話の続きを伺^{うかが}いました。

「すぐお隣だったのもあったし、ラビットハウスさんには最低でも週一回は通っていたわ。コーヒーが今まで飲んだことがないような一流の味で、それからは他のお店に行っても何かひとつ物足りない気がして。舌が肥^こえちゃったのかしらね」

「ありがとうございます」

お礼が自然と口に出て、おばあさまが首をかしげられてようやく自分の言ったことに気づきました。そうでした。この世界だとラビットハウスの娘ではありません。

「あ、いえ。そう言つてくださるとそのお店のマスターも大喜びすると思ひます。私も喫茶店でお仕事をしているんですが、お褒^ほめの言葉をいただけるとうりがたいので、つい無意識のうちにありがとうございますと言つてしまひました」

「そうねえ。うんうん。飲むたびに褒めちぎつてマスターがちよつと引いていたくらいあつたけど、お店を探し出してもつと褒め倒さなきやね。アッハッハ！」

次はマスターの奥様と子供の話になりました。

「こちらの奥様はとても明るくてねえ、その方がいると外が嵐でもお店の中が晴れ渡るくらいすごかつたの。季節に一回はお店でミニコンサートを開いて、聞こえてくる歌がとてもうまくて！ 何回かはお店にお邪魔して聴かせてもらつたわ」

「いいですね」

「ええ。そうそう、子供さんが生まれて大きくなつてからは二、三回その子も一緒に歌ってくれたのよね。私や常連さんも一緒に。大きくなつたつて言つても三歳とか四歳とかだつただけど」

昔の記憶が思い出されました。ほんの少しですが記憶に残っているのは一回、クリスマススイブのミニコンサートでお店にいたお客さん達と私、お父さん、お母さんで歌つた時でした。とても楽しかったのを覚えています。その時はおじいちゃんはいつも通りカップを磨いていたような気がします。

「あの子元気にしてるかねえ。うん。あれから十何年経つてからそれこそ二十歳近くになつてて、見た感じが——そうそう！ まさにお嬢さんそっくりなんじゃないかって！ ……もしかしてご親戚だったり？」

尋ねられ、驚きのあまり固まつてしまいました。私に……そっくり。

「どうかなさったの？ 口をあんぐりと開けて固まっちゃって」

「すみません。ついびつくりしてしまいました。こちらの方に親戚がいるとは聞いたことがないので、おそらくそっくりな他人だとは思いますが、そんなにそっくりなんですか？」

「ええ！ こうしてよく見たら、まるでその子が大きくなつてここに現れたみたいね」

「そうですか。なんだか会ってみたくなりました。ちなみに、その子のお名前つてわかりますか？」

一番気になる質問をしました。もしかしたら、その答えは私と同じ名前かもしれないなかったからです。果たして。

「うーん、聞いたことはあったんだけど、ちょっと思い出せないの」

残念ですが、情報なしでした。

「もし私と同じ『チノ』だったら運命めいたものを感じてしまうんですが」

「そうねえ。同じ名前なら確かに運命を感じちゃうわねえ。でもあの子は『チノ』というお名前ではなかった気がするわ」

「同じ見た目で同じ名前の子が離れた土地にいるというのは、まるで物語みたいな話ですし、物語の中にしかなさそうです。同じ見た目で違う名前というのも、お互いに知らない生き別れの姉妹みたいな感じで別の物語になりそうですが」

「ふふつ、それもまた壮大なことになりそう」

「ええ。できればその子、そのご家族に会いに、お引越したラビットハウスを訪問したいものです。美味しいコーヒーも気になりますし」

「もしお店の場所が分かったら、私にも教えてくださらないかしら？」

「いいですよ」

おばあさまからこの住所を教えていただきました。本来のラビットハウスの隣なので教えて頂かなくとも分かつてはいましたが、受け取った住所が私の記憶にあるラビットハウスの住所と番地が一番違いになっていてほつとしました。おばあさまには私の今のひとり暮らし先の住所を教えました。

そして、次の話はますます興味深いものでした。

「そうそう、ラビットハウスさんに月に一、二回ほど遠くから美味しいパン屋さんが出張販売に来てくれてね、もう最高だったの！ お店が引越しちゃってからはこの街まで来てくれてるか分からないんだけどねえ」

遠くのパン屋さん……非常に気になる単語が出てきました。

「私はなかなか遠出ができないんだけど、手紙のやり取りは時々してるの。ご家族五人、いつも楽しそうだわ」

「そのお店、行ってみたいです」

「ええ！ ぜひ一度行ってみて！ 住所はねえ……ちょっと待っててね」

おばあさまが立って押入の方に行き、立派な箱の中を探して封筒をひとつ持って戻ってきました。その住所は聞き覚えがある街で、宛先の名前はよく見知ったものでした。

「『保登ベーカリー』、ですね」

住所を書き写させてもらい、それからまた別の話題で盛り上がりました。まだ朝早めの時間にこちらに来たはずなのに、気付いたらお昼になっていました。おばあさまからは昼食へもお誘いいただきましたが、あまりご迷惑をお掛けするわけにはいきません。良い頃合いですのでここでおいとましました。

昼食を摂った後、街の図書館に行って調査することにしました。

このパン屋さん『保登ベーカリー』は、住所や名前から、ココアさんの実家

で間違いありませんでした。ただ、『ご家族五人』という点だけが私の記憶と違いました。おそらくココアさんのご両親、モカさん、お兄さん二人の五人で、ココアさんはこの世界には存在していない可能性が高いです。こうしてココアさんの不在が改めて示されると、やはり心がチリチリと灼^やかれるような感覚が生まれます。

でも、これまでで一番の『木組みの世界』につながる有力な手掛かりが得られたことは大きな前進でした。今すぐにでも保登ベーカーリーがある街に行きたいところですが、ここから都に戻り、さらに反対の方向にまた列車で数時間ほどかかります。お金やお仕事のスケジュールの問題もありますし、改めて遠征することにしました。そのためには情報収集あるのみです。

グルメガイドブック、そして地図を探して調べ物用のテーブルに持って行き、ページを繰って保登ベーカーリーが載っているページを探しました。お

店の写真はかつてココアさんについて行つて見たものと同じで、その横のインタビュー記事に添えられていたココアさんのお母さん・ちよこさんと、モカさんの写真も記憶の通りでした。思わず涙が出そうになつて、慌ててハンカチで拭きました。写真で見るパンの数々はそれを今すぐに手に取れないことが残念なほどに美味しそうで、ちよこさんやモカさん、お店に來ているお客さんのスナップ写真ではみんな楽しそうでした。ここにココアさんが交じっていたら、もつと賑やかでやかましくなっているだろうなと、そう感じられました。

ちなみにこのガイドブックに、別の街にあるという『ラビットハウス』が載っていないか確かめましたが、残念ながらそちらは載っておらず、手掛かりも特に得られませんでした。

今住んでいる、百の橋と輝きの都から保登ベーカーリーまで遠征するにはどのくらいのお金と時間がかかるのか、遠征時期はまだ決めていませんが、とり

あえず今日時点の時刻で見てみます。図書館には列車の時刻表の冊子もありましたが、初心者には読んで調べるのが難しそうなので、まずはスマートフォンで調べてみて、それを冊子でたどってみることにしました。ガイドブックと地図を棚に戻して、時刻表を手にとって戻りました。

スマートフォンで調べた結果をもとに時刻表を開いて、たくさん書かれた駅名の中から、百の橋と輝きの都の駅を探し出して、列車の時刻をもとにたどって行きました。こうして見えていると思ったよりも駅が多く、そして駅と駅の間が長いと分かりました。下へ下へとたどっていくうちに時刻の数字がどんどん大きくなり、その数字が何時間分も進んで、ようやく保登ベーカリーがある街の駅の行^{ぎょう}まで来ました。

「やっぱり、結構遠いですね」

ちなみにスマートフォンに出ていた都からその街までの交通費も、学生の身

にはなかなか大変なお値段でした。……夏休みにもう少しシフトに入れないか、マスターに聞いてみないといけませんね……。

調べ物を終えた後に図書館の中を巡ったら他の本にもいろいろと惹かれて、手に取って読んでいるうちにすっかり夕方になってしまっていました。現場百遍どころかまだ十分確認できていないところもありますが、慌てると逆にいろいろと見落としそうな気がするのです、また近いうちに時間を取って来たいと思います。そのためには一層貯金を頑張らないといけません。

ホテルに戻ってご飯とお風呂を済ませた夜、持ってきていたノートに午前中にラビットハウスの隣のおばあさまに伺った話を思い出しつつ書き留め、さらにグルメガイドブックや時刻表などで調べてメモした情報を見返しました。三日目にして大きな前進を得られた気がします。

☆ ☆ ☆

四日目、木組みの街滞在の最終日となりました。今日のうちに、百の橋と輝きの都まで帰るには、お昼前の列車に乗る必要があります。木組みの街には「この世界では」まだあと何回か来ることになりますし、元々の世界ではそもそもここに住んでいますので、お土産を買って帰るのは少し不思議な気分です。友人やマスターが喜んでくれるといいのですが。

お土産や車内で食べるお昼ご飯を調達するために早めにホテルを出て駅に向かい、その途中で公園の脇を通ると、遠くから見慣れた丸いシルエットのうさぎが跳ねてきました。昨日見つけた、ティッピーにそっくりのアンゴラウサギでした。

「ふふつ、お見送りに来てくれたんですか？」

その言葉に反応したかのように跳ね方が増え、最後に撫なでようとしやがみ込んだタイミングでうさが大きくジャンプして、私の頭の上に乗りました。不思議とティップピーを乗せていた時のようにしつくりと来て、立ち上がってみたら、身体がその感覚を記憶していたかのようにすぐにバランスを取ることができました。

「このまま今のおうちまで連れて帰りたい気分ですが、そうは行きませんので、また次来た時に会いましょう」

お別れの言葉を掛けてうさぎを持ち上げ、私の頭上から下ろそうとしましたが、狭い場所で器用に跳ねて逃げて捕まってくれません。なんとか捕まえて下ろしたらまた乗ってきてしまいます。

「あの一、頭から下りてくれないとおうちに帰れないのですが……」

その言葉は見事に聞き流されてしまいました。

「……仕方ありませんね」

結局、そのうさを連れてペットショップに立ち寄り、列車に乗せることができるサイズの移動用ケージ一式を買い、その中に入ってもらいました。ケージの中を覗き込んで、そのうさに改めて挨拶しました。

「これからよろしくお願いしますね。名前は……ティツピー、でいいですか？」

ティツピーが軽く頷いた気がしました。

駅でお土産とお昼ご飯を買い、さらにケージを載せるための切符を追加で買って、都へ向かう列車に乗り込みました。それからまもなく列車が発車し、本組みの街が徐々に遠くに離れて行きます。

街の方を見ながら、改めて誓いました。

ココアさん、みなさん、待っていてください。
必ず、会いに行きますから。

（『セカイにひとり』下巻第二号に続く）

あとがき

はじめまして。あるいはお久しぶりです。麦と申します。インターネット上ではより詳しく識別するために「麦（穀物P）」と名乗ったりしています。

ようやく、『セカイにひとり』が下巻に入りました。上巻収録の第一章以来長らく登場しなかったチノちゃんが登場です。待たせてごめんなさい。（チノちゃん＆読者のみなさま）

本文を読む前にあとがきを読まれる方にとってはネタバレとなってしまうが、下巻開始時点におけるチノちゃんは大学一年生です。当作品の起点における基準年齢から三歳分進んでいます。脳内でチノちゃんを成長させてお読みください。

以下、制作話です。

下巻が始まる第九章の章タイトルは、作品タイトルと同じ『セカイにひとり』としました。プロット第二版の段階から存在し、チノちゃんサイドの話に對してつけることを決めていました。最新のプロット第五版で章の順序を入れ替え、下巻冒頭にこれを据えることにより、新編開始の表現としました。

本来ですともう少しサクサク執筆を進めて、下巻相当の部分は二〇二二年夏に書いて完結させるはずでしたので、それから実に三年遅れで、しかも執筆開

始時点での予定では二章分入れるつもりでしたが、結果として一章分しかできておりません。従いまして、下巻も三、四冊に分かれることが確定しております。目安として、コミケ一回につき一冊分進みますので、おおむねあと二年かかる可能性があります。絶対完結させますので、お読み頂いている皆様はどうぞ健康にお過ごしください。

セカイにひとり 下 (一)

著 者 .. 麦 (穀物 P)

発行元 .. 麦之穂

サイト .. <https://muginoho.ehoh.net/>

連絡先 .. circle_muginoho@aotake91.net

発行日 .. 二〇二五年 (令和七年) 八月十六日

印刷所 .. ちよ古つ都製本工房 (<https://www.chokotto.jp/>)